

# フランシス・ポンジュ研究：“Pour un Malherbe”を読む(I)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 洋 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1009">http://hdl.handle.net/2297/1009</a>

## フランス・ポンジュ研究

### “Pour un Malherbe” を読む (I)

内 田 洋

#### “Pour un Malherbe” という書物

1965年に日の目を見たこの書物は、まずもってその外観においてきわだっている。ポンジュの生前に刊行された本の中で、四つ折判という大型の判型と333頁というこの分量はごく稀で、彼の読者にただちに《記念碑的》という形容を思いつかせるものがある。特にそれが、400年前の詩人に捧げられた書物であればなおさらだ。同じ年に出た *Tome premier*, Gallimard, 1965 は、判型は異なるが600頁を優に越え、『第一巻』というその表題は明らかに第一期の仕事の総括という性格をもち、事実、第二期のポンジュの新しい試みが既に始まっていることを、1940年代に書き綴られた「松林の手帖」その他の何篇かのテキスト、彼のいわゆる《描写の挫折の報告書の数々》を収めた *La Rage de l'expression*, Mermoud, 1952. は明瞭に示していたのだ。そしてこの大著『マレルブ論』は、ほとんどが断章形式の覚書や草稿の集積といった外観を呈する諸テキストから成り、その最初のもものが、1951年に書き始められている。そう考えると、『マレルブ論』は過去を総括するのでもなく、単に一詩人への自己の愛着の証でもなく、『第一巻』に拮抗してむしろ未来に開かれた、第二期のポンジュの仕事の理念と方法に関わる書物なのではないか。

『マレルブ論』と判型も頁数の点でもほぼ同じ量塊のオブジェと言えるのは、*L'Atelier contemporain*, Gallimard, 1977, 357p. である。これはポンジュの友人たる現代の画家・彫刻家たちの仕事に触れて、《現代のアトリエでは何が起きつつあるか?》を現場報告するテキストの集成だが、ただひとりの詩人の固有名に連なる『マレルブ論』と比べると、その芸術家の名の複数性において対照的だ。しかしわれわれの書物では、古今の無数の作家・詩人たちが中心人物の周りに配置されていく。さながらこれはフランス文学史の時間的展開を空間的配置に転換したかのようだ（事実、それは一本の樹木の形をもって提示されるだろう）。しかもまたそこには7年におよぶポンジュの生活と思考と執筆の過程が生き生きと跡づけられていて、われわれはいわば制作

の現場、作家の工房に立ち会う思いがする。その意味で、言語芸術と非言語芸術という違いはあるにせよ、共に現代芸術の最前線でのポンジュの考察の全貌をうかがうことのできる重要作品なのである。

次に、この書物は長短不均等な8篇のテキストから成り、それぞれの執筆の時期も直接の動機も異なる。しかもそれらがある構想に支配された一冊の書物として提示されており、単にマレルブに関して折々に書かれ、かつ完結した短文の集積なのではない。もしそうなら、これらのテキストの少なくとももあるものは、たとえば『集成』第一巻 *Le Grand Recueil I, Lyres*, Gallimard, 1961. に収めることもできただろう。事実、“Pour un Malherbe” という表題に始まり、“Pour un enlèvement, un concernement réels.” という一行に終わるこの書物の巻末には、《FIN》と明記されている。このような本を尋常の文集 (recueil) と見て、個々のテキストを独立に扱うわけにはいかないだろう。しかもこれらは厳密に明示された時間的な順序に配列されていて、その展開に沿った生成論的な読みが要求されているようなのだ。8篇のテキストについて、ポンジュの記述から概略知ることができるその直接の執筆動機を中心に、以下に注記しておく (注1)。

### I *Du 21 juin au 11 octobre 1951.*

『カイエ・デュ・シュッド』*Les Cahiers du Sud* 誌の求めに応じて書かれた、同誌「フランスの前古典主義」*Le Préclassicisme français* 特集号に掲載予定の「マレルブ論」の草稿31頁。日誌形式。

### II *Malherbe d'un seul bloc à peine dégrossi.*

テキスト I からの抜粋を主とした8頁。*Le Préclassicisme français*, *Les Cahiers du Sud*, déc. 1956 に収録された。末尾に《Juillet-octobre 1951.》と日付がある。同題のテキストが1965年に『新々フランス評論』誌ポンジュ特集号 *La Nouvelle Nouvelle Revue Française*, “Hommage à Francis Ponge”, No. 45, 1956 に収録された (p. 434-440) が、これとは別の内容となっている。両者を比較検討する必要があるだろう。

### III *Du 26 juillet au 16 septembre 1952.*

スユ社の「永遠の作家叢書」*Coll. Ecrivains de toujours* の一冊に、『彼自身によるマレルブ』*Malherbe par lui-même* を加えることを目指して書き始められたノート36頁。ポンジュ『全集』I (注2) の年譜によれば、この

本の執筆についてポンジュは1951年12月にスイユ社と契約を交わしたことになるが、どのような内容の契約だったのか、またそれがいつまで有効だったのか定かでない。いずれにせよ、この本は遂にポンジュによっても誰によってもまだ書き上げられていない。ノートは2カ月足らずで途絶している。

#### IV *Du 3 au 6 octobre 1953.*

アメリカのラジオ局の大学教育用放送番組の制作依頼を受けて書かれたノート6頁。

#### V *Malherbe-Radio U.S.*

上記番組「マレルブ」の完成稿28頁。注文の条件《タイプ原稿で20頁、内およそ10頁はナレーション、10頁は寸劇で、230～300行程度。》を遵守している。末尾に《12 octobre 53》と日付があり、注文を受けてから10日で仕上げたことになる。

#### VI *Du 19 décembre 1954 au 26 mai 1955.*

来るべき書物『マレルブ』のありうべき種々の構成プラン、その他のノート154頁。6カ月に及ぶ日誌。1955年はマレルブ生誕400年に当たるため、ポンジュはスイユ社の「永遠の作家叢書」のほかにも、彼のマレルブを世に出す可能性を精力的に模索したのである。『全集』Iの年譜、1955年の項に以下の記述がある。《6月、ポンジュ、「プレイヤッド叢書」に『マレルブ』を提案する。ガリマール、これを拒否。1956年4月まで、マレルブの作品集4巻の記念版を出すという彼の企画、数社から断られる（スイユ、クラブ・フランセ・デュ・リーブル、エディション・デュ・ロシエ、ファスケル）。》この作品集に添えるべき序論ないし解説としても、『マレルブ』の種々のプランが試みられたと推測できる。プレイヤッド叢書の『マレルブ作品集』は、1971年にアントワヌ・アダンの手で刊行された。

#### VII *Du 22 au 27 décembre 1955.*

ノート4頁。および1956年の日付でポール・ヴァレリー『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序、注および雑説』からの三つの引用文を掲げた1頁。前者の執筆動機が何であったかは不明。後者はテキストVIIとVIIIの間に孤立して見える。この引用文の頁の機能が問題となるだろう。

## VIII Du 13 avril au 24 juillet 1957.

37頁の日誌。(このテキストの後半の頁には、欄外にしばしば《Introduction》の文字が現れており、ポンジュの『マレルブ』の序論部分の下書きないし覚書と推測される。一冊の書物の末尾に至ってようやく「序論」が試みられているという逆説はありふれたこととして、それはある書物の完結が間近に迫っている証拠だろうか。そしてこの「序論」がまさに序論として機能すべき書物は、この“Pour un Malherbe”とは別の、たとえばポンジュ自身が刊行を企画したプレイヤッド叢書の『マレルブ全集』なのだろうか。



以上のように、性格の異なるテキスト8篇で構成された書物の読解が、錯綜したものとなることは覚悟しなければならない。そのほとんどが日付をもち、内面の日誌の形式で書かれていて、同じ語句・主題の反復と変奏をはばかることなく提示する、第二期のポンジュのエクリチュールの特徴をそなえてはいるが、明らかにこれらは草稿そのものではなく、文法・正字法とも無誤謬の、読みやすく整えられた清書原稿に基づいている。おそらくこれがマレルブについて書かれたもののすべてではないだろう。個々のテキストの清書段階での修正や取捨選択のみならず、それらが一冊の書物の中に編入される際に、どのような改変を蒙ったのか、この書物の草稿類がまったく流布していない現状では知る事が出来ない。しかし遅くとも1955年には、ポンジュは《マレルブに関する私の仕事を利用して》、《覚書の全体(日々のこの格闘、あるいは結婚)からなる、全く私であるような本》を書くという行動予定を記しており(注3)、これがおそらくこの Pour un Malherbe として、(執筆開始以来実に15年ぶりに)実現したのだ。状況のどのような改善があったのか、1961年にはガリマール社がポンジュの企画に理解を示したらしく(注4)、1964年2月には原稿の見直しに没頭する詩人の姿を年譜に窺うことができる。書物の表題が決定されたのは、おそらくこの最終段階においてだろう。

ところで、この表題はいかなる意味か。この点に関するモニック・ロビヤールの言及が、断定を回避しつつその多義性を解きほぐそうとしている。それによれば、この表題は批評の企ての未完結ないしは挫折をほとんど明らかに確認していて、その企てを目的論的というより生成論的なパースペクティブで捉えている(つまり pour が問題なのだ)。ここに何か新しい価値への賛同を主張する宣言書の自己主張のトーンを聞き取るのは間違いかもしれない

い。その場合は、これをポンジュによって秘かに開示された、ある内密のマレルブへの献辞と見ることになる。マレルブの全体像を把握しようとする企てだとは主張していない(不定冠詞 un の意味)。それに固有名を普通名化し、批評対象たる人をほとんど無言の世界の物と化している。物に声を与え称揚するポンジュの、これは固有性の罷免の企てかもしれない、等々(注5)。いずれにせよ書物の表題は最初に読むべく与えられる対象だが、予断を排して書物の読解を始めようとする者にとっては、読むことが最後に可能になるものでもある。ポンジュがマレルブの名を冠した一冊の書物の実現を熱烈に追い求めた事実のみ依拠して、われわれは仮にこれを『あるマレルブ論のために』と訳しておく(以下、『マレルブ論』と略記、引用文の後では PM とし、頁数を記す)。

### テキスト I を読む

1949年10月、『カイエ・デュ・シュッド』誌の directeur-fondateur ジャン・バラールの依頼を受け、同誌のために「修辞学の問題」に関する特集号の編集を引き受けたポンジュは、寄せられた数々の論考の口火を切る「プロローグ」(注6)を書いた。同誌295号から301号まで、2年にわたって連載されたこの特集の企画段階でポンジュが果たした役割、問題意識、またはマルセイユのこの文芸誌とポンジュの関係全般については、Bernard Beugnot の論考(注7)に詳しい。さらに1950年には、同誌を拠点に活動し、編集委員でもあった詩人ジャン・トルテルから、「前古典主義」の再検討を試みる特集号の企画に協力を依頼されたようだ。この二人の往復書簡集(注8)によって、それを窺うことができる。《マレルブの件、了解しました》(書簡49)。トルテルは年末にパリに出てポンジュに会い、《前古典主義者》としてのマレルブを論じてくれるよう依頼したと思われる。しかし「修辞学の問題」の延長線上でホラティウスとアルトーに関する論考を書く約束もあって、ポンジュの筆は進まず、トルテルはホラティウスよりも当面マレルブに関するテキストを早く書き上げるように、再三督促している。翌1951年10月9日付のポンジュのトルテル宛手紙は、次のように原稿執筆の最終段階を伝えている。

「マレルブ」が6月から私の頭を占めています。その間にもっと急ぎの仕事がほかにもあったのですが、一ヶ月前からはこれにかかりきりになっています…私にとってマレルブは、私が崇拜する詩人という以上に、私の人となりや「倫理感」の一部をそっくり表す人だということが、少

しずつわかってきました。私がそれについて言う必要があったこと、彼について言いたかったことが、深刻な、錯綜したものになってしまいました…（書簡59）

この手紙を裏書きするように、『マレルブ論』のテキスト I は、執筆時期が1951年6月21日から10月11日までと明記されている。そして確かにこのテキストは、ここで《私の人となりや「倫理感」の一部》(toute une partie de ma formation et de mon “éthique”)とされているものを一人称で語ることから書き出され、繰り返しそこに立ち戻っている。そのとき、テキストは当然ながら自伝的な色彩を帯びる。たとえば1951年10月9日の次の記述、《…私に関する限り、マレルブはいわば私自身という木の一部分をなしているのだ。私の成長過程で、彼は常に内心深く私の実質と結びつき、一体となってしまった。書物を通して、学校で習い覚えて、というのでは全くない（あるいはむしろ、ただそれだけではない）。》(PM, p. 36) それはこのテキストの執筆を導く第一の力線となっているばかりでなく、やがてテキスト III において《精神的浸透》(Imprégnation) という語で把握しなおされ、『マレルブ論』を書く根拠・理由の第一に挙げられることになるのだ (PM, p. 77)。ポンジュはこのとき自覚していただろうか、マレルブが己の一部だということこそ、彼について語ること（つまりはある種の自己自身について語ること）を、これほど《深刻な、錯綜したものに》する理由なのだということを。勿論、フランス文学史上の詩人マレルブを再評価し、リセの教室で教えられている陳腐なマレルブ像を打破したいという欲求がある。愛する詩人を学者・批評家によるその空疎な還元的評価と矮小化から救い出さなければならない。《マレルブについて語る理由は、彼を先生や中学生どもに任せてはおけないということである。こういう解放された人物はもっとまじな扱いをうける価値がある。》(PM, p. 21) (注9) いわば義憤に駆られた歴史再評価の記述が、テキストの第二の力線となっている。あくまで激昂した文体ながら、それはある種の客観性を装って三人称の、しかしまたしばしば一人称複数の主語のもとで語られる。

テキストを織りあげる第三の重要な力線は、さらに積極的に、今ここで、未来にむけてマレルブを擁護・顕揚しようという欲求であり、ある種の政治的情況の中での詩人の使命と新しいエクリチュールの理念を、マレルブを範として高唱する頁を生む。記述はそのとき宣言書ないし詩論の性格を帯び、ほぼ一人称複数が主語に立つ。それは形式的で没人格的な「われわれ」では

なく、いわばマレルブを土台として立つポンジュの二重化され・補強された「私」だと言うことができるだろう。

われわれはまず、テキストの磁場の中を第一の力線に沿って横断してみよう。

日誌の外観を呈し、1951年6月21日の日付をもつ最初のノートは三つの断章から成る。第一の断章は一人称で貫かれ、ほぼ全面的に《私の人となり》を語る自伝的記述だ。「私」とマレルブの時間的距離を還元し（《私は半世紀を生きていることになる、自分では生き始めたばかりのような気がするのだが…私は彼をよく知っている…彼が生まれてから四百年近くになるわけだ。私の生涯のわずか八倍。実際これは取るに足りない。ほんの昨日のことだった。》）、運命的な類似を指摘して一体化を志向し（同じプロテスタントの家柄、マレルブの生地カンに青年期を育まれた、共に南仏に縁が深い、など）、あるタイプの風俗・気質・時代精神への共感ないし偏愛を吐露している（《私の父もたくわえていたあの小さな顎髭。マレルブは良き父だった…》、《カンでは古代の影響とイタリア・ユマニズムの影響とが、実に好ましいかたちでゴシックの影響に応戦していた。とりわけベルトー、ヴォクラン、マレルブといったあの真のプレイヤッド派が。数々の古代の思い出が強固に残り、しかも消化されている、そういう時代が私は好きだ…》）。第二の断章は、一転してマレルブという固有名の普通名詞化による、その本質直観の試みとっていいだろう。これは既に第一断章に見える次の一節の展開である。《malherbe という男性的—male—な何物か、そして自由な（雑草 mauvaise herbe めいた）。城壁や堅固このうえなく美しい四角な家、あの「永遠にゆるぎ無き構造の美しき建築物」の足下に生える草》。この雑草のイメージは、アンリ四世やコリニー提督やマレルブが共有したユグノー的・フランス的な面、特にその堅忍不拔な精神を象徴している。彼らはまず、イギリスやギーズ家やメディチ家に抵抗した十七世紀の砦として隠喩的に捉えられ、次に砦との隣接関係から換喩的に草が、さらにマレルブの名を分解して雑草が導出される。石や構造物の堅固さが男性的な価値として賛美され、それがマレルブとその一党の名に結びつけられているばかりでなく、同時にそこにつきまとう自由な悪しき草、雑草を遠ざけることができない。《問題の雑草とは…比較的稀だがしぶとい、シバムギのように密生する草である…良い草でもあり悪い草でもあり、何の役にも立たない、ただ石組みの隙間を広げるだけ、ただ草という存在を永続させるだけ。——あきらかにこれは最良の草である。かなり意地の悪い

質で…良き怒りを根に持つ抜きがたい存在…。石と草、両者は明らかに背反する価値でありながら、共にポンジュのマレルブ像の本質を構成する比喻形象となっており、そのアンビヴァランスを露呈していると言えそうだ。

8月14日のノートでは、一人称は一気に背景に後退し、概ね対象を客観的に（ただし彼の視点から）眺め、ことばに定着しようとしている。「私」が現れる稀な例——《舗装工や石工が石を選んでは配列していくのを見ると、私はマレルブを思い浮かべる。その石の隙間に草が生えるかも知れない。まさにそれはうってつけの図だ。その組み合わせられた石の塊をばらばらにするには、一本の樹木が必要になるほどだ。》

9月16日のノートはほぼ全面的に、カンのマレルブ中学時代の思い出を語る。マレルブの生家は、通学の途次、日々に見慣れた家だったし、その美しい銘文は文学的栄光の観念を少年に植え付けた。将来を嘱望される優等生ポンジュは、学校を居心地の良い自宅同様に感じていた。そしてまたマレルブの作品そのものが、彼には《きちんとした仕事、念の入った仕事》がなされた時代の家のようにであった。

9月30日から10月1日まで、ポンジュはカンを訪れ、戦災を受けた町の再建の様子を見る。《10月1日の一日を、私はカンへ行って過ごした。》——一人称単数のこの注記の後、旅の感想を語る文章の主語は、なぜか一人称複数に変わる。事実、翌2日にパリでポンジュはこう記している——《実情を目のあたりにしてわれわれは怒りを禁じえなかった…》この旅の目的は、実はほとんど、この怒りを深く己の内に掻き立てるためだったと言っている、《諸々の価値の保持と獲得のために》多くのことをなすエネルギーに変えるために。とりわけ《発言し、語りつづけるのに必要な語調を見出すために、われわれは10月1日と2日のあの怒りを利用するだろう。》だが現時点での経験や思考を語るべき、日誌に最もふさわしいこの場所で、予想に反して一人称単数が棄てられるのは、ここが既に第三の力線の支配下にあるからにほかならないだろう（それは後述するように、ほぼ9月25日の記述から始まっている）。

10月9日と11日のノートでは、多くの場合に「われわれ」で記述され、時折「私」が現れ、不規則に交替する。次の一節——《怒りは良き助言者だ、と私は思う。われわれはカンから十三キロの海を見に行ってきた（海を見て、そのことが確認できた）》——は、その典型的な例だ。主語の設定におけるこの不安定さは、単に著者の軽率に帰せられるべきだろうか。しかし何よりも10月9日の重要な次の断章を読もう。

マレルブ？…私にはきっと時間がないだろう。確かに、彼は私の精神に間違いなく浸透している。私は南仏の《改革派》の家庭の出だが、思春期をまるまるカンで暮らした。毎日、彼の家の前を通った。名誉についての私の観念は、おそらくその家に、十七世紀の美しい大きな文字で、「1555年にマレルブはここに生まれた」とある銘文から形成された。

無言の世界よ、わが唯一の祖国よ、私の保持すべきおまえよ（なぜなら私はただおまえからのみ、生とことばを得ているのだから）、否、私はおまえを棄てはしない、石、草、家々、文字…私はおまえたちを棄てはしない、私の石、私の作品、私の木の一部をなすあの人を語りながらも！

私のマレルブ、彼は私の作品の中心で、私の木の中で、大きく生長した。だが、まさにそれゆえに、私はその樹皮しか差し出すことができない… (PM, p. 39)

「私」を主語に立て、ポンジュが自己とマレルブとの一体化を希求しつつ、自己の来歴と精神形成を自伝的に語る断章は、バリエーションを生みながら再三反復されているが、上掲の一節はテキスト I におけるその最終形態といてよい。しかし難解な断章だ。ここはこのテキストの詳細な解釈を試みるべき場所ではないが、詩人の言語活動（パロール）は常に新たに、事物の沈黙の世界から出発しなければならないという自らの詩論に基づいて、今、マレルブを語ろうとするポンジュは、対象を人間ではない、《石、草、家々、文字…》であるような何かと見ているのだ。それらの存在の沈黙からことばと生命を得るのでなければならぬ。対象としてのマレルブは、むしろ《私の》石であり木であるような《作品》である。それは私の作品の中心にあって、その生長と共に変化する存在だ。この『マレルブ』が、年々樹皮を脱ぎ落とす樹木のように、これら断片的テキストを次々に生み出すほかはないのはそのためなのだ。

次に第二の力線をたどってみよう。6月21日のノート、第三(そして最後)のごく短い断章は、フランス文学史の中にマレルブを位置づける最初の記述、というより、以後しばしば繰り返されるポンジュの文学的偏愛(le parti pris)の表明となっている。《マレルブにあってはすべてが私に好ましい…》、これに匹敵しうるのは、最良の瞬間におけるボードレーとラ・フォンテーヌのみ、という。これを起点に、文学史に対するポンジュの見解をテキストのそこかしこに拾い集めることができる。本来、前古典主義の再検討を課題とした雑誌の特集号のために書き出したのだから、これが本筋となるのが当然だ。

しかし、ここで専門の文学史家や教授たちに対抗して、文学史的常識を覆すための何らかの実証研究をする意図はポンジュには全く無い。これは明らかに一種の批評的エッセーだ。

文学史の中のマレルブ？授業で問題にされるマレルブ？私に何を言わせようというのか。一体、この件で私がどんな役割を演じることが出来るだろう、いわば引越し業者の役割以外に？だがきつと、『カイエ・デュ・シュッド』誌が私にこの仕事を負わせたのは、そのことをよく理解したからだろう。前古典主義の館では、真に良き趣味の内に建て直されたとしても、その最も美しい部屋でさえマレルブにはふさわしくないだろう。いや、だめだ、彼はとうの昔にどこかよそへ引越してしまっただけだから。しかしむしろ、…その部屋はいつまでも空室のままにしておくべきだ… (PM, p. 39)。

要するにこれが、マレルブ論でこの企画に参加するようポンジュに勧めた、トルテルに対する彼の返答なのだ。一方でアカデミックな批評（アンリ・マルティノン、ルネ・フロミヤグ他）の《鈍感さ》を辛辣に非難し（《最近の批評家たちはみな…今私が言った十分な感性を欠き、作品の帰属をめぐる論争に逸脱している》）、他方で詩人が一種の批評活動にのりだすことに躊躇をおぼえながら（《詩人が批評家になるとは、悪しき兆候だ。彼の祖国は、誰ひとり決して排除することのない無言の世界だ。そこから逃亡すれば支障無しではすまない…無言の世界は…かつて誰ひとり追放したことがない。たぶん他の顕職（たとえば歴史家とか批評家の地位）を熱望してこの国を棄てた詩人を除けば…》）、結局その躊躇を自ら退ける（《詩人が批評家になることを、批評家たちはすぐさま悪しき兆候と見る。詩人たち自身、これをなかなか容赦しない…私はと言えば、そこに何の不都合も認めない、もし批評家となったわれらの詩人が彼自身でありつづけるのであれば…》）。そうして彼があえてすることは何かと言えば、人が前古典主義の小部屋に恭しくも押し込めてきたマレルブを、どこかよそへ引越しさせてしまうことだ。だが、一体どこへ？

ポンジュは百年戦争の荒廃から百年を経た1555年におけるノルマンディについて語り、この土地の精髓を讃えることから始める。彼によれば、十六世紀のノルマンディは精力的で、文化に富み、調和がとれていた。ラテン・ギリシア文明の流入によってノルマンディのアテネというべきカンが現出し

た。ヴォ克蘭・ド・ラ・フレネ、ベルトー、デ・ジヴトー、マレルブらによるカン・ルネサンスが興った。マレルブを生んだこの土地が、南仏から来た自分を育んだ（こうして自分の中で、南の要素と北の要素の幸福な融合が果たされたと言いたげだ）。リセ・マレルブの生徒ポンジュは、早くもその伝統の継承者となる運命を信じて疑わなかった。

他方では、マレルブの人格の特質を粗描する一種の精神的ポルトレが、幾通りも試みられる：《性格上のある種の力強さとしたたかさ、判断の確かさと己の目的に達するための粘り強さ、澄んだ目と不屈の意志、自己の関心事に対する熟慮と大胆、留保と待機、…断固たる散文精神…》(PM, p. 14) など。そして、これらのポルトレを例証すべき作品断片が引用され、ごく短い評語が添えられていく。

マレルブの作品の特質は、ほとんど石工の仕事を思わせる。《マレルブは美しい灰色の石で、われわれの中庭を舗装し、基礎を固め、それぞれの語が己の適正な寸法を有して揺るぎ無い住居を築いた。彼はすべてを秩序づけ、語群から必要なものを切り出し、それらを確保し、四角にし、調整し、磨きをかけた…》《おお、同様に整然たる庭、舗装された中庭、あるいは石板を敷き詰めた地面、離陸のための滑走路、共鳴する部屋々々…汝の城館にあってはどの部屋も整然として、無用の物にいささかも塞がれず、豪華に石板を張られている。足音が鳴り響く。三次元のポエジー。抽象的だが、無味乾燥でなく…》(PM, p. 17-18)。ここに見るある種の家とその中庭のメタファーは、マレルブ個人の作品を叙したもののだが、それはそのままフランス文学という殿堂(宮殿)の構成要素となる。《マレルブと共に、人は王の舗道を駆け抜け、フランス文学の名誉の前庭に入る…モンテスキューと共に壮麗な裏庭から出ていく。後はふたたび無秩序に錯綜した街道、小径、野道のただなかに出て…一切は手つかずのままだ。》(PM, p. 15) 要するにマレルブからモンテスキューまでが、快適に人々の住める「フランス文学」の環境だ。この比喻形象は繰り返し現れるだろう。《われわれはマレルブとモンテスキューしか生み出さなかったにしても、家は基礎を据えられ、築きあげられ、屋根を葺かれ、整備され、中庭が舗装され、庭園は美しく植え込まれ、その後の幾世紀もの間、われわれは安全でくつろいだ気分を味わった》(PM, p. 20) とさえ言われている。ドービニエやテオフィルなどの同時代者は比較にもならない（あれら端役たち！）、マレルブに対比されなければならないのは、とりわけ、真の権威者たるパスカルだ。この《転倒した大頭の神童》に対して猛烈な罵声が浴びせられるだろう。この激昂したアンチ・パスカリアンが許容できない

のは、とりわけ自然な文体の中に人間を求めるパスカルの思想（注10）である。ポンジュによれば、これは詩人や批評家たちの常套句になっている陳腐平板な思想であり、衆生を惑わすデマゴジーだ。むしろ書物の中に、人間とは全く別のものを求めなければならない。たとえば《美しい女たちの面上にある、目に見えながらも表現しえない何物か》を。自然な文体の中に「人間」を見出して悦ぶのではなく、熟慮された文体の中に「美」を実現せんとする「著者」にこそ、感嘆すべきだという。

マレルブの作品の特質をもっと別様に語り、この偉大な、破格の精神に対して取るべき態度を明らかにしているのは、9月27日の次の断章だろう。

マレルブに対しては些かのなれなれしさもわれわれには禁物だ。いかなる作家もそれを己に許すことはできないだろう…

彼がそれほどに尊敬の念を吹き込むというのでは（できえ）ないし、崇拜の念でもない。こうした感情は彼の功績に見合ったものではない。この場合はただ熱狂（enthousiasme）のみが、われわれに彼の示してくれた偉大さ、彼の精神と性格の力強さにふさわしい…（PM, p. 25）

マレルブを尊敬し崇めるのではなく、自ら熱狂に駆られ、精神を高揚させること、これがマレルブに対してふさわしい応答の仕方だということだ。そしてポンジュは己の「言っている」ことを、この熱狂に駆られた書物『マレルブ論』を書くことで「為している」と言えるだろう。さらに次の一節――

彼にあっては、表現のうまさなどというものは無い。（まず最初に訪れた）恩寵だの、空想だの、機知だのも無い。（反駁できそうな）あれやこれやの真実もない。そんなものが問題ではないのだ…

これは一種の機械だ。しかも他のどんな機械にもまして強力かつ多様で、変化に富んでいる。謹厳な、堅固な、晴朗な、揺るぎ無い時計。これは永久運動だ。

これはその余の一切を粉碎する。これは順調に機能している辞典だ。絶対的言語だ、ほとんど意味作用をもたない。あるいはむしろ意味作用そのもの（またそれだけのもの）だ。

これは事物のマチエールをプラスした数学的な美だ、しかも感受性によって験され、理性にまで導かれた。石に刻まれた秩序だ。語とことば（パロール）の適正化作業だ、巧妙なとか、機知に富むとか、優雅なと

か、気のきいた、愉快的な、あるいは惨めなといった精神の係数ぬきの。  
(PM, p. 25-26)

これらの文言をマレルブのしかじかの詩篇に当てはめて、納得しようとしてもおそらくは無理だろう。ポンジュ自身も、引用作品のごく簡略な注釈を通して、それがいかに永久運動をする精密な時計仕掛であるか、いかにありとあらゆる意味を産出する意味作用そのものであるかを、証明しようとはしていない。ここで肝心なのは読者に証明して見せることではなく、おそらく《絶対的言語》なるものを欲求させることなのだ。時計、辞典、石に刻まれた秩序、これらの非人格的な形象の彼方に、われわれは果てしない言語の運動を支配する永遠不易の法則を予想すべきだろう。マレルブをあたかもフランス語文法の制定者であるかのように思いなしてみれば、少なくとも彼に寄せるポンジュの熱狂の性質が理解されるだろう。彼にとって、マレルブの作品はある種の非個人的なポエジーを実現していないまでも、それを熱烈に志向し、挫折することを恐れなかった果敢な試みだ。そう評価する以上、マレルブはそうした志向と無縁な凡百の詩人とは別格なのである。

かくしてポンジュは、この十六世紀の先輩詩人に最高級の賛辞を贈ることをためらわない。世界文学の神々を祀る殿堂の中で、とはいえ事実上ヨーロッパ文学だが、マレルブの位置は《フランス国民の精髓》が占めるべき第一等の席であるべきだ。《マレルブを越える偉大な精神はない。われわれは安んじて、彼を最も著名な同時代者たちの列に並べることができる。つまりセルヴァンテス（およびゴンゴラ）、シェイクスピア（およびフランシス・ベーコン）と同列に…》(PM, 29) ともいう。

要するに、全盛期の古典主義者と目される人々の《模範》(Cf. ボワロー『詩法』)であったマレルブが、前古典主義の範疇に収まるわけがない。そう呼ばれる時代に生きた人である以上、この特集号に名を連ねるのは当然だが、《実のところ、彼を入れずにおくこともできるかもしれない。勿論、彼は無鑑査の人なのだから…》。フランス文学のあらゆる小部屋にフリーパスで出沒するマレルブ？ そう言わないまでも、確かにポンジュにとって、一個の汎時的な形象 (figure) が問題であったらしい。《しかしマレルブは、実はわれわれが古典的完成と呼ぶものに優る種類の完成を示しているのだ。非時間的ならざる一種の完成、[あくまで]彼の時代の、しかし充足した、永遠の完成だ。彼はその完成の性格によって、彼の時代を、また他のあらゆる時代をも超え出ている。》(PM, 33) 有名な詩句「マレルブの書くところのものは永遠に存続

する」も、この文脈に組み込まれている。作品の（詩人の、というよりは）超時代性の固有名たるマレルブ。だからこそ、彼を収容すべき部屋は無いか、あるいは空室のままでなければならない。だがポンジュは彼を、その胸奥以外のどこへ引っ越しさせただろうか？確かにそこでなら、マレルブは一個の理念として、ひとりの前衛詩人の言語活動の指導原理として生きつづけるだろう。未来を創造するエネルギーの源泉でありつづけるだろう。だが、われわれは既に、文学史への避けがたい顧慮を示す軸を踏み外して、どこかでテキストの別の軸上を歩き出していたのだ。

われわれが第三の力線と規定したそれが鮮明になるのは、9月25日のノートからである。主語は一人称の単数・複数の中で揺れつづけるが、内容的には感想や意見の私的なメモ、あるいはモノログに似たものから、不特定の他者に対する思想的立場の表明・宣言に近いものまでを含む。全体としてポンジュ固有の詩法の陳述を志向する断章群だと言えよう。

ポンジュはここでまず、彼がマレルブについて語る《ひとつの》理由を、自己にか、あるいは読者にか、明示している。既に見たように、学校の先生や中学生、さらには《無能な批評の専門家の判断》に、この《解放された人物》を任せておけないからだ。われわれには今やこれが、あらゆる文学史的限定から解放された人物、という意味であることがわかる。そこから話が拡張される——《もっと一般的に言えば、次のことを納得されたい、真の前衛は、わが国の古典作家のなかでも最良の人々を引き受けること、彼らを身に請け負うことが出来るようになったのだと。われわれはそのことを気兼ねするような人間ではない。》(PM, p. 21) ポンジュが自己および自己の語りかける幾人かの読者を指して《前衛》と呼んでいることは明らかだろう。真の前衛は古典作家、つまりは伝統の価値を否定しない、《身に請け負う》者として現れている。それは多少とも危険な、さもなければスキャンダラスなことで、それをあえてするには大胆さと勇気とを必要とした。彼は遠慮会釈無くそれをするのが《出来るようになった》、だがいつからか？それをポンジュは、ここでは明言することなく遠回しに、《ミトリダートのように、若い頃からありあまる毒を自由に用いることができたので、毒に馴れてしまわずにはいなかった》と語るだけだ。漠然としているが、あるがままの文学への失望が様々な文学的反抗へと人を駆り立てるのであることは推測できる(注11)。そして反抗を支える基本的感情は怒りである。次の断章で語られるのは1941年（動員解除後、対独レジスタンス活動時代）以来のポンジュの倫理感の変遷、と

りわけ政治活動に対する幻滅（1947年、ポンジュは共産党への黨員登録を更新しなかった）——《もはや民主的な党派も貴族的な党派も…存在しないということに私は気づいた。あるのは（諸特権の）保守主義諸派と、革命的な（しかも思い上がった、野蛮な）一種の宗教との提携のみだ》（PM, p. 21）——と、その後の文学的アンガジュマンへの決意である。《共和国に奉仕する最良の仕方は、言語に力と品位 (force et tenue) を与え直すことだと考えるのも、現時点ではこれまた正当なことである》（PM, p. 22）、そしてその模範となるのがマレルブだ。この目標を為し遂げるには、彼と同じ偉大な性格・気質が必要となる。《人を驚かすことも、眉を顰めさせることも、何でもできる…ただ己をのりこえようと欲し…不可能な理想を欲する》（PM, p. 23）、そんな性格、極めて稀な精神が。しかし、現代の詩人の状況はアンリ四世の宮廷詩人と同じではない。そこで《われわれは作品と同時に、それを読む読者を形成する必要がある。われわれは幾人かの若者と未来に働きかけるのだ。》（PM, p. 24）テキストはこれ以後、選ばれた読者に向かってある綱領を提示する動きを見せる、言い換えれば、宣言書の性格をもった断章を、一人称複数の主語のもとに断続的に綴ることになる。勿論、それが謙譲の複数か、自尊心を表す誇張的複数か、いずれにせよ今のところは修辭的な nous にすぎないことをポンジュは意識している。《われわれの偉大な先人に対する愛において高められ、その愛に忠実でありつづけたわれわれ（私は私ひとりのことを言っているのだが）——今やわれわれは、彼らが表象する美德の数々を恥じたり、嘲ったりしているのだ。》（PM, p. 24）ポンジュの内面の分裂はここに余りにも顕著だ。ともかくポンジュは、審美的・倫理的な諸価値の途轍もない後退により、粗野・下品が大衆の意識を満たしている現代について語り、《祖国の（本来の意味での）敗北》の時代における詩人の義務に言及する。《われわれはおそらくこの世での存在理由をただ一つしかもたない。それはわれわれが継承した諸価値の維持である…価値の維持はわれわれに課せられた義務のひとつであり、もう一つは新しい価値の創造である。》（PM, p. 25）一読してほとんどフランス国民の栄光と尊厳に敏感なナショナリストの口吻を思わせるものがあるが、これは良かれ悪しかれポンジュの体質というほかはない。ただマレルブが抽象的な問題を己に課したわけではなく、王侯貴族の課題に対処して書いたように、ポンジュも具体的な政治的現実の中で敢然と態度決定をしたのだ。それがどれほど根源的かつ広範な視野のもとでの選択であったか、あるいは逆に皮相狭隘な選択であったかを、われわれは今後、見極める必要がある。

これに続く数頁の記述を通して、ポンジュが自己に課した二つの義務、すなわち過去から継承した価値の維持と新しい価値の創造が、どのように関係しているかを見ることができる。9月30日の次の記述が出発点となっている。

われわれの存在根拠は、なるほど、第一にはきっぱり世界へと立ち帰ること(物への加担)、そしてそこで人間を涵養し直すこと、まったく未曾有の、新しい価値の開示に参加することだ——そうしてこそ、われわれは若干の人々が最終的に古人に背を向けてしまうのも容赦することができる——だがわれわれは古い時代の価値の力と可能性を感じるだけに、これを引き受けることを躊躇すべきではない。(PM, p. 26)

この『物への加担』(1942)の詩論は『プロエーム』(1948)所収の諸篇によっても知られるが、このテキストでも「無言の世界はわれわれの唯一の祖国である」という命題を繰り返し、詩人はこのなんぴとを追放することもない祖国、事物の沈黙の世界に沈潜し、そこからことば(パロール)の帝国へと浮上するのでなければならない、と論じている(注12)。そのことばこそ彼の求める新しい価値、新しい人間の創造のよすがであることは言うまでもない。これは既に確立した第一期のポンジュの詩論の反復にほかならない。この新しい価値・ことばの獲得のため、いわばフランス的価値の再生のため、なすべき多くのことがあることを憤激をもって確認したのが、戦争で潰滅したカンへの旅だった。パリに帰った10月2日の項に、次の記述がある。《われわれは過去から継承したものを維持し、期待されているものを獲得するために、なすべきことが大いにある。マレルブはそんなわれわれの助けになろう…正しく理解されたマレルブがわれわれの助けになるという…確信がある。》勿論、ポンジュにとっての範例としてだ。また岩礁の多い嵐の海に行く船舶(すなわちフランス語)の支檣索のようなものとしてだ。範例とは、時間の節約のためにもわれわれがいつも反復するわけにはいかない経験、と規定した上で、ポンジュは《過去の時代の完璧な作品は…ある種の完成の範例を提供してくれる点で有益たりうる》と言う。それは時に人を模倣と隷従に陥れるからであろう、ポンジュはそこに危険が存在することを指摘し、他の芸術(絵画、彫刻、音楽)から教訓を得た方が危険は少ないかもしれないとしつつも、それを苦にしないだけ《十分にわれわれは強固だ》と自らを鼓舞する。完成の範例は自己の批判検閲の刃を研ぎあげることに役立つ。それは内在化され、われわれの細心綿密な顧慮そのものを形成する。そうした顧慮の一連列が、

マレルブその他の名前あるいはその名を負う作品なのだ。ポンジュはこれを《諸属性の台座》(Socles d'attributs)と呼んでいる。要するに彼にとって重要なのは、マレルブの忠実な彫像や肖像を造形することではなく、時間の節約のため、自己にとっての一個の台座を据えることだったと言ってよい。それが彼の拠り所、根拠 (raisons) となる。《ひとは常に自分の根拠を明瞭に意識しているわけにはいかない。そこで、それがその代わりとなるわけだ。》これに依拠するのは飽くまで一時しのぎ、便法とみなされる。ポンジュは誰にもまして、こうした便法を用いることなしに済ますことが出来た人だ。なぜなら《無言の世界から出発して、そのどんな些細な対象物にも尊重の念を抱くことができれば、その物の形態そのもの、あるいはそれから受けた感動の分割しえない統一性は、それ以外のあらゆる規範を無用とすることができる》からだ。しかし外的世界のある対象もしくは印象の美的表象は、文学の場合、言語的素材において形成されるのである以上、この素材の法則を無視することはできない。そして《一編のテキストが、延長（あるいは時間）の世界、要するに外的世界のある実在を、何らかの仕方で解明しようと目指すことができるためには、まずもってそれ自身の世界、つまり独自の法則に従うテキストの世界の現実に到達していなければならない。その法則がどんなものかを、若干の昔の傑作だけが理解させてくれる》のだ。これは他の場所で、やがて「言葉への配慮」(compte tenu des mots) と定式化されるだろう。これが「物への加担」(parti pris des choses) とともに、ポンジュの詩論の二本の柱をなす。絶対を求める精神にとっては、両者が等号で結ばれるのでなければならないだろう。最後の断章でポンジュは、そうした絶対的精神の最終目標を示す。《彼らは諺を目指しているのだ、つまり署名無しで済ませられるほど…明白な言語表現を。この種の詩人は無言の世界の何物にことばを与えるときも、必ずや…無言の世界に帰着するような、客観的にそこに再編入されるような、そんな作品＝オブジェを生み出さずにはいない。これこそ詩のテキストにおける曖昧性と明白性の無差別、あるいはいっそ神託的性格、をなるほどと思わせるものなのだ。》だが実際には、マレルブは無署名で済ますどころか、ポンジュによればその名をもってむしろ二度署名した。その理由は、マレルブの企てが《世にあらんかぎり抽象的ならざるものであったから》だというのだが、ここでポンジュは何を言おうとしたのだろうか、その意味をわれわれは未だ明らかにし得ない。

われわれはここまで、断続し、交叉し、分岐し、絡み合って、テキストを織りあげていく断章群の背後に、三本の主要な力線を直観して、その跡を追跡してきた。だがそれは、多くの断章の執拗なまでの反復と変奏を抹消することによって、多少とも線的な（たとえそれが複数の線であるにせよ）論理に還元することを目指したからではない。むしろこれら三種の異質な磁力が持続的に働く場においてこそ、既に書かれた主題が、繰り返し捉え直され、方向転換され、継ぎ足されていくのであり、またその逆も真であることを証明したかったのである。そしてこの異質な複数の力の絶えざる干渉こそ、テキストに断片性と未完結性を強いるものにほかならないだろう。先に引用した1951年10月9日付ジャン・トルテル宛の手紙で、ポンジュはこうも記していた。

原稿はほとんどすぐに書き上げられそうな気がするのですが、一方ではまだまだ長い時間を必要とするかもしれないという予感もあります…あなたの特集号のために、その断章のいくつかをつなぎ合わせる方法がないか、それを毎日、執拗に探しています。ひょっとすると四半時もすればそれが見つかるかもしれません…（書簡59）（注13）

《断章のいくつかをつなぎ合わせる方法》という言い方から、われわれはポンジュが、テキストをひとつづきの等質な論理展開に還元しようと模索したと考えることはできない。それはわれわれの見た三つの力線を単線化しようとするものにほかならず、不可能なことでもあり、またテキストの孕んだ熱狂を冷却することになる。とすれば、テキストは断片的なままで、なおかつ統一性とまで言わずとも、ある種の秩序の印象を与える必要がある。テキストIは、その日誌形式が時間軸に沿った思考の発展を（扉に掲げられた銘文、特に《le cours de mes pensées》を見よ）強調していたばかりか、停滞や後戻りをしながら発展していく思考の錯綜を描き出して緊迫感があった。そこには決して散漫・無秩序の印象はない。しかし雑誌掲載の論文に日誌形式を採るわけにはいかないし、紙数の限定があって、同一主題の反復・変奏を演出するわけにもいかない。そういう条件の中でポンジュが最終的に見出した解決が、7つの断章からなるテキストII、すなわち「一塊の石そのまま粗彫りのマレルブ像」（Malherbe d'un seul bloc à peine dégrossi）であった。

（以下次回）

Octobre 1999.

## [注]

- 1 Jean Thibaudeau, *Ponge*, Coll. “La bibliothèque idéale”, Gallimard, 1967, p. 145-146. のほぼ同様の注記になった。
- 2 Francis Ponge, *OEuvres complètes, I*, “La Bibliothèque de la Pléiade”, Gallimard, 1999.
- 3 *Pour un Malherbe*, p. 267 (以下、本文中でも注でも、PM と略記する)。ポンジュはスイユ社のモノグラフィ(永遠の作家叢書のことだろう)を書くこと、ガリマール社のプレイヤッド叢書に『マレルブ』の一巻(un Malherbe)を加えること、ほかにラジオや映画の仕事を計画している。今ではほとんど読まれることがなくなった古典詩人の名誉の顕揚を己の使命とする、ポンジュの異様なまでの情熱が感じられる。
- 4 Jean Thibaudeau (1967), op. cit. の年譜によれば、1956年に『マレルブ』の出版についてジャン＝ジャック・ポヴェールと交渉して不調に終わった(この時どんな構想の書物が問題となっていたのかは不明)後、ポンジュは《ガストン・ガリマールと Pour un Malherbe の刊行を企てる》とある(同書 p. 40)。しかしこの時点で書物のタイトルがそのように決まっていたとは思えない。
- 5 Monic Robillard, *Pour un Malherbe ou l'autobiographie nouée*, in *Etudes Françaises*, 17/1-2, “Francis Ponge”, Les Presses universitaires de Montréal, 1981, p. 129-142.
- 6 “Prologue aux questions rhétoriques” (in *Le Grand Recueil II, Méthodes*, Gallimard, 1961). 特集号の緒言によれば、この企画の発端は、1946年にポンジュが初めてジャン・バラールに会った際(Cf. 『全集』 I 年譜)、ジャン・ポーランの『タルブの花』(1941)によって《流行》となっている修辞学に関する問題で特集号を組んではどうか、と提案したことにあるらしい。
- 7 Bernard Beugnot, “*Questions rhétoriques : Ponge et les Cahiers du Sud*”, in *Revue des Sciences Humaines*, No. 228, oct.-déc. 1992.
- 8 Francis Ponge-Jean Tortel, *Correspondance 1944-1981*, Stock, 1998. ポンジュとトルテルの交友は、南仏でのレジスタンス活動の必要から、二人が1943年にマルセイユで会ったのが機縁となった。トルテルは1944年に、ポンジュの『物への加担』の書評を『カイエ・デュ・シュッド』誌に掲載して以来、5篇のポンジュ論を書いている。Cf. Jean Tortel, *Francis Ponge cinq fois*, Fata Morgana, 1984.
- 9 《こういう解放された人物》(Un affranchi de cette espèce) という表現のむこうに、franc という語を媒介として François (Malherbe) のみならず Francis (Ponge) の存在を重ねて透視すべきだろう。
- 10 「自然な文体を見ると、ひとはすっかり驚き、大喜びする。というのも、ひとりの著者の姿を見ると予想していたところに、一個の人間を見出すからだ。」(パスカル『パン

セ』、ブランシュヴィック版、断章29)。

- 11 ポンジュが身に請け負うことを選んだ古典作家、マレルブに限って言えば、その重要性がわかるのは文学の歴史のある時代以後なのだ。テキストIII以降、ポンジュはしばしばロートレアモンの名を特筆するだろう。たとえば、《人と話していていつも言うのに、まだメモしていないこと——マレルブはロートレアモン以後にしか、本当には理解されえない。》(PM, p. 76)、《私の『マレルブ論』の重要ポイントのひとつはこれだ——この著者の相対的(かつ絶対的)な重要性を把握できるようになるのは、ただロートレアモン以後、つまりわれわれがある種のフランス文学を閉じた、終結した、二重に鍵を掛けられた、締め括られたものとして考えることができるようになってからにすぎないということ。また読者も著者も、誰も彼もが本当に、出かけて行ってはすべてに飽き飽きして帰る癖が身に沁みついてしまった時からだ。》(PM, p. 291)
- 12 おそらくその延長上で、テキスト「無言の世界はわれわれの唯一の祖国である」(Le monde muet est notre seule patrie) が書かれ、1952年『芸術』Arts 紙に発表された(後に *Le Grand Recueil II, Méthodes*, Gallimard, 1961 に収録)。
- 13 おそらく10月9日付のポンジュの手紙を読むことなく、トルテルは10月10日付ポンジュ宛に手紙を出している。彼はその中で、再三の督促にもかかわらず依頼原稿をなかなか書き上げられないポンジュを、こう励ましている。《あなたの最近のひどい躊躇が、ポンジュらしい高邁な細心綿密の最高形態であることは知っています。フランシス、私はあなたを誇りとするのを恐れませぬよ。なぜなら今日、あなただけが本来的にマレルブのものであるあの細心綿密を持ち合わせているのですから。》さらにまた、マレルブという名の表すものが、このパリの友人にとっていかにのっぴきならないものであるかを知悉していたトルテルは、雑誌原稿を巧みに督促しつつも、その『マレルブ論』が果てしのない仕事になりそうだとということを見事に予感していた。《あなたの「マレルブ」——ポンジュが深々と関与しているそのグローバルなマレルブ論…それを特集号の何頁かにそっくり挿入できないかどうかと考えています。この論考をあなたに依頼したとき、ある恐るべき発条の止めを私ははずしたのだということがわかりました。それにあなたにお願いしたことは、単にひとつの発端でしかない、あなたにとって出発というか、行き着くところまで行こうとする激しい欲望でしかないということがね…とここであなたにお願いしたものを、あなたはきっと既に書き終えていると信じています…》(書簡60) (F. Ponge-J. Tortel, *Correspondance 1944-1981*, op. cit.